

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

門崎は苫前町史の動物の章の執筆を依頼され、管内で大正 4 年(1915 年)に発生した 熊 (Ursus arctos) による「三毛別の熊事件」を、再検証したので、それを以下に記す。この事件は一頭の同一熊により 6 名が殺され(胎児を含めれば 7 名)、3 名が重軽傷を負わされた事件で、道内で発生した熊による人身事件として、被害者数が多いと言う点で、いまだ未曾有の事件である。

<大正 4 年の三毛別の熊事件>

事件発生時の記録は、当時の小樽新聞(9 月)と北海タイムス(9 月)の紙面にある(北海道立図書館に当時の新聞を記録したマイクロフィルムがある)。その 35 年後に、犬飼哲夫氏により「熊に斃れた人々、1947 年」に事件の経過が書かれて居る。但し同書では事件の発生年を大正 4 年とすべきところを 14 年と誤記している。その後、木村盛武氏により、当時の事件の生存者など事件を識る人からの聴取を混じえた詳細な記述がある「苫前熊事件、1980、ヒグマ 10 号別冊」。これらの記述を比較吟味すると、被害者の姓名や年齢、そして被害の発生経過などに違いが見られるが、今となつては当事者はなく検証し得ない。そこで既存の前記資料を基に事件の核心を熊の生態学的な面から端的に記す。敬称は略す。

①本件は、一頭の雄成獣熊により、2 軒の開拓農家が襲われ、合計 6 名が殺され(胎児を含めれば 7 名)、3 名が重軽傷を負わされた人身事件である。

②第一の人身事件は、大正 4 年(1915 年)12 月 9 日(木曜日)の推定午前 10~11 時の間に「犬飼、木村の記述」、新聞は「午後 7 時頃と記している」、三毛別山(446m)の西約 2.5km 地点のハッペナイ川(六線沢、御料川等の異称がある)の右岸の「太田三郎 42 歳」の家に、一頭の雄成獣熊が侵入し、家に居た妻、阿部マユ 35 歳「新聞は、マヨ、まよ、35 歳と記述。犬飼と木村はマユ 34 歳と記している)と養子、幹男 9 歳「9 歳は新聞と犬飼の記述。木村は 6 歳と記している)を襲い殺し、妻女の遺体を拉致した。

③翌 10 日「マユ」の居場所を雪上に残る熊の足跡と血痕を伝い探したところ、太田家から東方向の三毛別山方面に新聞によると 70 間「(136m)」程の地点に、熊が「マユ」の遺体を監視しているのを発見した。熊は遺体をこの地点まで引き摺り運び(この 136m という距離は、熊が人の遺体を引き摺り移動させた距離として最遠である。これまでの記録は、2001 年 5 月 6 日に、札幌市管内定山溪の国有林で、工藤健三氏が、熊に殺され、90m 程引き摺られたのが最遠であ

る(森林野生動物研究会誌 No.28 に門崎允昭が記載)、頭部と両下腿足部以外の部分を食べつくし(頭と四肢下部を食い残すのは、熊が人や牛馬や鹿を食べる場合の通性である。先ず胸部臀部上腕部大腿部等の筋肉部を食べる。内臓から食べるというのは間違いである)、遺骸にクワイザなどを咬み切り、啞え持って来て被せてあった(熊が己の食物と見なした時にする特性である)。熊は一時捜索隊目掛けて寄って来たが、銃器等で反撃されると身をひるがえし、立ち去った。そこで、遺体を収容し、太田家に安置した。当時の三溪の雪深は書かれて居ないが、事件地の三溪に 10 数年住み同所の四季を識る北海道史研究者の関秀志氏によると、12 月初めの雪深は年により異なるが平年で 20~30cm だと言うから、当時もその程度の積雪が三溪地区にはあったものであろう。

④10 日(金曜日)の通夜の午後 8 時半頃、再びこの熊が太田宅に侵入し(新聞と木村の記述)、棺桶をひっくり返したりしたが(木村の記述)、空砲を撃つなどしたら熊は室内から外に逃げ出たとある(新聞の記述)。犬飼は 11 日の通夜の晩、熊が太田宅の板壁を破ろうとしたと書いて居るが、この犬飼の 11 日の記述は誤りで、新聞と木村の記述 10 日が正しい。

⑤10 日の晩、太田家を襲った熊は、その後、太田家のほぼ真北 500m 程の地点にある明影宅を襲い死傷者が出た(姓を新聞はアキガ、木村はミヨ、とルビを付しているが、苫前町教育委員会の門崎允昭への書簡では、明影力蔵さんの親戚の方は、書簡に「ミヨ」とルビを付け、さらに本州の出身地では「メウ」と発音すると言ったとある。なお、「三溪に住む、林健志氏によると、地元三溪では「ミヨイ」と発音していたと言う。

⑥明影宅には明影の妻子 6 人の他、熊を恐れて同宅に避難していた他家の者 4 人を加えて、計 10 人が居た。そこに、午後 8 時 50 分頃からこの熊が侵入し、約 50 分間にわたり人を襲い(木村の記述)死者は、齊藤タケ 34 歳(1 胎児を含む)、齊藤巖 6 歳、齊藤春義 3 歳、明影金蔵 3 歳の 4 名、負傷者(重傷)は明影ヤヨ 34 歳、明影梅吉 1 歳、長松要吉 59 歳の 3 名がでた(年齢は数え年である)。胎児も露出していたが、胎児は無傷で、それ以外の死者はいずれも身体のいずれかの部位が熊に喰われていたと言う(木村の記述)。

⑦加害熊は 14 日(火曜日)の 10 数名の猟師による熊狩りで、太田宅から北北西に約 2km 地点で射止められた。止トメを射射したのは、小平の鬼鹿オシに住む猟師の山本兵吉ハチ 58 歳(1858~1950)であったと言う(木村記述)

⑧本件の熊が人を襲い、被害者の身体の相当な部位を食べたことについて、食い貯めがし得なかった飢えた熊であると書かれているが(犬飼、木村記述)、射止めた熊が痩せていたとの記述がない事から、私(門崎允昭)はこの熊は病的な「食欲亢進症」であったのではないかと見る。熊の大きさ(体長)等の記録は無い。また、越冬穴に入って冬籠もりしているべき時季なのに、穴に籠もらず出歩いて居る異常な熊との記述があるが(犬飼、木村)、北海道の熊が冬籠もり穴に入るのは、早いもので 11 月 20 日過ぎ、遅い熊は、冬至頃に入るのが通例であるから、この熊を「穴持たずの熊」と規定するのは誤りである。⑨本件の熊は成人女性を好んで襲い、女性の衣類などに異常な関心を示したとの記述があるが(木村)、それは熊が侵入して、人を襲った現場(家屋)に居た成人男性は、明影家の事件現場に一人「長松要吉 59 歳」居たにすぎず、他は総て成人女性と子供のみで、成人女性が子供を守るべく、熊に積極的に立ち向かった結果、成人女性に被害が出たと見るべきであろう(門崎允昭の見解)。(丁)

